

の研究や、南インド史概説の叙述などは、いまだにその水準を抜く研究が見られない。本書には、南インド研究にたずさわるインド内外の多くの研究者が論文を寄せており、全体で62編の論文が **History and Epigraphy, Art and Archaeology, Religion and Philosophy, Language and Literature, History of the Far East** の項目別に収録されている。

*

Proceedings of the Second International Conference-Seminar of Tamil Studies, 1968, in 3 volumes, Vol. I, ed. R. E. Asher, International Association of Tamil Research, Madras, li, 498p., Rs. 70/-

南インド関係近刊歴史学・刻文学・言語学図書および定期刊行物

Saw Ganesan et al. (eds.): **Professor K. A. Nilakanta Sastri Felicitation Volume, In Commemoration of His 80th Birthday**, Prof. K. A. Nilakanta Sastri Felicitation Committee, Madras, 1971, 537p., Rs. 45/-

本書は、昨年80才の誕生日を迎えたニーラカント=シャーストリ教授に捧げられた記念論文集である。教授の経歴・業績についてはここに多言を要さないと思うが、教授は1927-47年の間、マドラス大学のインド歴史および考古学科で教鞭をとり、その後、マイソール大学インド学科教授、マイソール州政府考古局長などを歴任し、その間に数多くの優れた論文・著書を発表されている。南インド史学は教授の幅広く、精力的で、かつ精緻な研究によってはじめてその基礎を築かれたと言ってよく、中でも、チョーラ王朝史について

1968年1月、マドラスで開催された第2回国際タミル学会議のプロシーディングスは全3巻として出版の予定で、このほど、言語学関係の論文を収録した第1巻がマドラスで発行された。総会の発表を含めて54編の論文が収められている。歴史学その他の論文を掲載する第2巻、タミル語の論文を収録する第3巻もつづいて発行の予定である。

*

K. V. Ramesh: A History of South Kanara, Karnatak University, Dharwar, 1970, 340p., Rs. 30/-

本書は、表題の示すように、マイソール州、サウス・カナラ地区の歴史を記述するもので、時代的には、先史時代から16世紀中葉ヴィジャヤナガル王国の衰亡に至る時期が取り扱われている。マンガロールを中心とするサウス・カナラ地区は、西はアラビア海に面し、東は西ガーツ山脈によって遮られ、古くからトゥルの国 (*tulunādu, tuluva* 他) として知られている。その住民はドラヴィダ語族に属するトゥル語を話す。著者は同地区の出

* アジア・アフリカ言語文化研究所助教授

身で、現在インド政府考古調査局の刻文編纂所 (Office of the Chief Epigraphist) の副主任の職にある。これまで、同地方の歴史書としては、B.A. Saletore: *Ancient Karnataka, Vol. I., History of Tuluva*, Poona, 1936 が唯一のものであったが、著者は、その後に発見された多くの刻文資料を用いて内容を充実させている。南インド史上の大きな王朝についてはこれまでにかなりの研究が著わされているが、今後は、このような地方史の研究を進めることが必要であり、本書の出現は、その要請にもそうものである。

*

A.V. Narasimha Murthy: **The Sevunas of Devagiri**, Rao & Raghavan, Mysore, 1971, 272p., Rs. 40/—

セーヴナ朝とは、これまでヤーダヴァ朝の名で知られてきた南インドの中世王朝である。英雄ヤドゥの子孫を意味するヤーダヴァという名称はこの王朝に唯一のものではなく、この王朝は刻文中で自己をセーヴナと表現しているのが、最近はこの名を用いる研究者が多い。この王朝は、長く後期チャールキヤ朝の封臣の地位にあったが、12世紀末独立し、同様に封臣の地位から独立したカーカティーヤ朝、ホイサラ朝と共に、デリー=サルタナットによって亡ぼされるまでデカンの政治史に大きな役割を果たした。セーヴナ朝史についての概説書はこれまでになく、その出版がまたれていた。本書はかつてアーンドラ大学に提出された博士論文をもとにしているが、未出版の刻文資料も利用されている。行政についての記述は簡略であるが、巻末に、封臣・官吏・地方行政区分などについてのアペンディクスが付されていて、その欠を補っている。

K.K. Pillai: **A Social History of the Tamils**, Part I, University of Madras, Madras, 1969, 602p., Rs. 30/—

ピッライ教授は、古代から現代にいたるタミル社会史を三部作として著わそうという構想をもち、本書はその第一部として、紀元前から紀元後 600 年までの時代が取り扱われている。教授のいう社会史とは、王たちの事跡を主として記述するこれまでの王朝史に対して、庶民の生活を中心とした歴史記述の意であり、本書では、シャンガム文献を広く渉猟して記述を進めている。

*

P.B. Desai (ed.): **A History of Karnataka**, Kannada Research Institute, Dharwar, 1970, 483p., Rs. 20/—

デサイ教授の他に、2名が協力して執筆したカルナータカ地方の歴史概説で、先史時代から現代までを記述している。便利ではあるがヴィジャヤナガル王国の起源の取り扱いその他にパローキアリズムが見られる。

*

G. V. Srinivasa Rao (ed.): **South Indian Inscriptions Vol. XIX, Inscriptions of Parakesarivarma**, Archaeological Survey of India, Delhi, 1970, Rs. 58/—

シリーズの第13巻 *The Cholas* は、チョーラ朝の刻文中から王名が *Rajakesarivarma* とのみ記されているものを集めて編集したものであったが、本巻は、それと対をなす *Parakesarivarma* とのみ記される刻文を集めたものである。1904-1935年の間に蒐集された471刻文を収録する。

Shrinivas Ritti & G.C. Shelke (eds.):
Inscriptions from Nanded District, Shri
Sharada Bhuvan Education Society,
Nanded, 1968, lxix, 260p.,

マハーラーシュトラ州、ナンデド地区の刻文（主としてカンナダ語、少数サンスクリットおよびマラーティー語）を集めたもので、刻文の年代は各時代にわたっているが、中でもカリヤニのチャールキヤ朝のものが多い。

*

B.R. Gopal (ed.): **Karnatak Inscriptions, Vol. V**, Kannada Research Institute, Dharwar, 1969, xl, 358p., Rs. 15/—

シリーズの5巻目で、前期チャールキヤ朝をはじめとするカルナータカ地方の王朝に属する137の刻文のテキスト（ほとんどがカンナダ語・カンナダ文字）が収録されている。

*

K. Rajayyan: **South Indian Rebellion, The First War of Independence, 1800-1801**, Rao & Raghavan, Mysore, 1971, 315p., Rs. 50/—

1800-1801年の南インドの反乱（反英武力闘争）については、これまで全く注意されて来なかったが、著者は、タミルナードゥ文書館その他に保存されている英国側資料を調査している過程で、その存在に気づき、以後村落資料や地方歌謡までも渉猟して、反乱の存在と内容をはじめ明らかなにしたのが本書である。ポリガールや農民によって計画された反乱は、結果的には、イギリスに通じた旧支配者層の裏切りとイギリスの軍事力のために完全に鎮圧されてしまったが、運動の過程では、地方やコミュニティの枠をこえた連帯

が生み出されていて、セポイの反乱がもち得なかった国家的統一への志向がそこに存在したという。そのような反乱の性格規定については、異論もあろうが、これまで注目されずにいた反乱の事実を明らかにし、それを資料によって裏づけた著者の功績は評価されるべきであろう。著者は、マドゥライ大学の近代史学科の主任教授で、これまでに、*Administration and Society in the Carnatic 1701-1801* (Trirupati, 1966), *A History of British Diplomacy in Tanjore* (Mysore, 1969) その他の著書があり、南インド近代史に関して、現在もっともプロダクティブな研究者である。

*

P. Spratt: **D.M.K. in Power**, Nachiketa Publications Limited, Bombay, 1970, 164p., Rs. 25/—

反バラモン・反北インド的タミル中心主義を標榜しながら、社会主義的政策を遂行せんとする南インドの政党 D.M.K. (ドラヴィダ進歩連盟) については、1965年出版のハードグレイヴの業績 (R.L. Hardgrave: *The Dravidian Movement*, Bombay) があるが、本書は、D.M.K. が1967年の選挙で大勝し、州政府の権力の座についてからはじめて出版された著作である。著者は、かつてのイギリス共産党員で、現在はマドラスに居住している。著者は、D.M.K. 前史とも言うべき1920年代の Justice Party の活動にも注目しているが、その点については、日本でも已に言及されているアーシックの詳細な研究 (E.F. Irshick: *Politics and Social Conflicts in South India*, Bombay, 1969) がある。

M. Andronov: **A Standard Grammar of Modern and Classical Tamil**, New Century Book House, Madras, 1969, xii, 342p. Rs. 15/—

本書の特徴は、書名からも察せられるように、古典タミル語と近代タミル語の両方を記述の対象としていることで、さらに詳しくいうと、著者は、タミル語を、古典文章語、近代文章語、口語（標準語）、方言（地方的・カースト的）の四者に分っている。しかし、本書ではそれを歴史的な視点からは問題にせず、記述的に（phonetics, morphology, syntax）その差異を明らかにすることに重点が置かれている。従来の文法書が、文章語または方言的口語の何れかに片よっていたために、両者の連関、あるいはタミル語の全貌をつかむことが極めて難しかったのであるが、本書の出現によって、その点の理解は一步進められることとなった。文章語をはなれた標準タミル語なるものは、現在徐々に形成されつつあるもので、本書ではじめてとり上げられるものである。著者は、モスクワの東洋研究所の所員で、レニングラードのルージンとならぶソヴィエトのタミル語研究の第一人者である。

*

R.E. Asher & R. Radhakrishnan: **A Tamil Prose Reader**, Cambridge University Press, Cambridge, 1971, 237p., £3.40

文法の学習を終え、已に易しいタミル語なら読めるようになっている外国人のためのタミル語読本で、19人の作家、ジャーナリスト、政治家が、インド独立後に発表した著作から32編の章節を選んで提供している。各編には詳細な註がつけられ、巻末には100ページに及ぶグロスリーがつけられている。このような読本としては、かつて Pope や Clay-

ton のものもあったが、已に内容が古く、本書は、編集に細かい神経が行きとどいていることと相俟って、現在の生きたタミル語を学ぶのに最適である。

*

K.M. George: **Malayalam Grammar and Reader**, National Book Stall, Kottayam, 1971, viii, 342p., Rs. 15/—

著者は1964年シカゴ大学でドラヴィダ言語学を講じたが、その後、引きつづきアメリカで平和部隊の隊員にマラーヤラム語を教えた経験にもとずき本書を著わした。著者が標準マラーヤラム口語と考えるもの（教養ある人々によって話され、文章語に近い）をその対象とし、全体25課でコースをおわるように構成されている。各課は、Conversation, General Notes, Grammar Notes, Exercises より成り、文字は第8課から徐々に導入される。マラーヤラム語については、これまでに適当な入門書がなかったため、本書の利用価値は大きいものと思われる。

*

Bh. Krishnamurti & P. Sivananda Sarma: **A Basic Course in Modern Telugu**, Hyderabad, 1968, xxix, 287p., Rs. 12/—, distributed by Motilal Banarsidass, Delhi

本書は、著者らのハイデラバード、シカゴその他でのテルグ語の教授経験にもとずいて編纂されたもので、現在形成されてきつつある Modern Standard Telugu（主として海岸地区の上・中流の教養ある人々によって話される）を取り扱っている。全体24ユニットより成り、各ユニットは、Notes on Grammar と Exercise を伴う。テルグ文字ははじめに書き方が説明されるのみで使用されず、例文は全てローマ字表記によっている。著者

の一人クリシュナムールティは、オスマニア大学の言語学の教授で、*The Telugu Verbal Bases* の著者として名高い。

*

Korada Mahadeva Sastri: **Historical Grammar of Telugu, with Special Reference to Old Telugu c. 200 B.C.—1000 A.D.**, Sri Venkateswara University Post-Graduate Centre, Anantapur, 1969, xi, 440p., Rs. 20/—

現在知られている限りでは、テルグ語の文学活動は11世紀の Nannaya によってはじめられ、そこに Middle Telugu の成立を見ることがになる。それ以前の Old Telugu についての資料は、主として6世紀以降に属するテルグ語刻文ということになるのであるが、本書は、約100の刻文を丹念に検討することによって Old Telugu の再構成を試みたものである。これまで、カンナダ語については、A.N. Narasimhaiah, G.S. Gai のもの、マラーヤラム語については、A. C. Sekhar のもの、タミル語については、K. Zvelebil 他のももの(さらに後掲する S. Agarthialingom 他のももの)があったが、ここにテルグ語についての成果が発表されたことによって、ドラヴィダ語比較文法のかんりの材料が出てきたことになる。

*

Kamil Zvelebil & Jaroslav Vacek: **Introduction to the Historical Grammar of the Tamil Language**, Academia, Prague, 1970, 222p.

著者の一人ズヴェレビルは、かつて Andronov, Glazov と共同で、同じ題名の本を出版した (Moscow, 1967) が、今回は、プラハでの弟子ヴァチュクと共同して、ズヴェレビルが古代の刻文を扱い、ヴァチュクが近世

の歌謡を取り上げて分析している。

*

Kamil Zvelebil: **Comparative Dravidian Phonology**, Mouton, The Hague-Paris, 1970, 202p.

Caldwell の《ドラヴィダ語比較文法》が出版されてから已に100年以上の年月が経っているにも拘らず、その後の研究は殆ど進展していない。本書は、現在ドラヴィダ言語学の第1人者と目される著者が、タミル語を中心に広く資料を集めてまとめ上げたもので、これまでの研究に見られない多くの仮設が提出されている。Introduction でドラヴィダ比較言語学の現状が概説されている。

*

Kittel's Kannada-English Dictionary, in 4 volumes, revised and enlarged by M. Mariappa Bhat, University of Madras, Madras, 1968-1971

1894年に出版されたキッテルの *Kannada English Dictionary* は、カンナダ語研究史上の一大金字塔であったが、絶版となり長く入手出来なかった。現編者は、キッテルの時に降に発見されたカンナダ文学作品から新たに語彙および例文を加えており、内容の up to date なものとして、研究者の便に供せられることとなった。

*

Albertine Gaur (ed.): **Catalogue of Malayalam Books in the British Museum, with an Appendix listing the books in Brahui, Gondi, Kui, Malto, Oraon (Kurukh), Toda and Tulu**, British Museum, London, 1970, 300p.

大英博物館所蔵のドラヴィダ本について

は、これまでに、タミル本のカatalog (Pope, 1909; Barnett, 1931), カンナダ本のもの (Barnett, 1910), テルグ本のもの (Barnett, 1912) が出版されているが、ここにゴール女史によるマラヤーラム本のカatalogが出されたことによって、一応全部が出揃ったことになる。但し、カンナダ本、テルグ本などについては、旧カatalogの増補が必要となってきた。

*

Annamalai University, Department of Linguistics Publications

アンナマライ大学の言語学科には、Centre of Advanced Study in Linguistics が置かれ、タミル語を中心とするドラヴィダ言語学の研究が盛んで、出版物の数も多い。以下には、標記のシリーズの No. 11 以降のものタイトルを記す。

No. 11: S. Agasthalingom: *A Generative Grammar of Tamil*, 1967

No. 12: M. Shanmugam Pillai: *Spoken Tamil-II*, 1968

No. 13: T. Burrow: *Collected Papers on Dravidian Linguistics*, 1968

No. 14: G. Vijayavenugopal: *A Modern Evolution of Nannul*, 1968

No. 15: M. Andronov: *Two Lectures on the Historicity of Language Families*, 1968

No. 16: P.S. Subrahmanyam: *A Descriptive Grammar of Gondi*, 1968

No. 17: S. Agasthalingom & N. Kumaraswami Raja (eds.): *Dravidian Linguistics (Seminar Papers)*, 1969

No. 18: N. Kumaraswami Raja: *Post-Nasal Voiceless Plosives in Dravidian*, 1969

No. 19: A. Kamatchinathan: *The Tirunelveli Tamil Dialect (Linguistic Survey of Tamilnadu)*, 1969

No. 20: K. Kushalappa Gowda: *Gowda Kannada*, in press

No. 23: S. Agasthalingom & S.V. Shanmugam: *The Language of Tamil Inscriptions 1250-1350 A.D.*, 1970

*

Journal of Tamil Studies (International Association of Tamil Research, Thamilakam, Sterling Road, Madras-34)

タミル研究については、これまでマドラスから *Tamil Culture* という季刊誌が発行され、研究の組織化に大きな役割を果たしてきたが、1964年 International Association of Tamil Research にが結成され、1966年に第1回、1968年に第2回の国際学会が開かれるに従って、タミル研究に中心を置いたドラヴィダ研究のための機関誌の発行が計画され、1969年4月に創刊号が刊行された。現在のところ出版は年2回で、Vol. II, No. 2 (1970年10月)まで刊行されている。昨年は、International Institute of Tamil Studies の設立に伴う事務移転その他の事情で発行がなく、今年 Vol. III が発行する予定である。なお、Vol. II, No. 1 は、近年注目を集めているインダス文字解読についての特輯号である。

*

Damilica (Tamilnadu State Department of Archaeology, Madras)

アーンドラ=プラデーシ州、マイソール州、ケーララ州にはかつての藩王国が存在していたため、古くから独自の考古学局が存在して、現在の州政府にひきつがれてきている。タミルナードゥ州には、中央政府のインド考古調査局の支部が置かれていた(現在も)が、1961年に、新たに州政府の考古学局が誕生した。本誌は、約10年間、発掘、保

存、刻文蒐集などの仕事をつづけてきた同局が、年刊として出版することになったもので、内容を三部に分け、Parts I & II は、年次報告を、Part III は、内外の研究者の論文を掲載している。

*

Epigraphia Andhrica (Director of Archaeology and Museum, Govt. of Andhra Pradesh, Hyderabad)

アーンドラ=プラデーシ州では、州政府考古学局の中に、同州での刻文蒐集と研究を推進するための刻文部が設けられたが、本誌は、同部編集の研究誌で、1969年に No. 1 が発行された。その後はいまだ刊行がなく、今後どの程度定期的に発行されるものか判らないが、インド考古調査局刻文編纂所発行の *Epigraphia Indica* にならって、新発見の重要刻文紹介を中心とした研究論文が掲載されている。

*

A. Velupillai (ed.): **Ceylon Tamil Inscriptions**, Pt. I, University of Ceylon, Peradeniya, 1971, 77p.
Karthigesu Indrapala (ed.): **Epigraphia Tamilica (A Journal of Tamil Epigraphy)**, Dept. of History, University of Ceylon, Peradeniya, 1971. Vol. I, Pt. 1,

前者は、セイロンのタミル語刻文を集録し

て解説したもので、後者はセイロンの、あるいはセイロンに関係あるタミル刻文についての研究誌である。

*

International Journal of Dravidian Linguistics (Department of Linguistics, University of Kerala, Trivandrum)

ケーララ大学の V. I. Subramoniam 教授その他の研究者が発起人となり、最近 Dravidian Linguist Association (c/o Department of Linguistics, University of Kerala, Trivandrum) が発足し、昨年6月、第1回の年次集会在トリヴェンドラムで開催された。同 Association は、表題の機関誌の発行を計画しており、近く創刊号が出版される予定である。

*

The Radical Review (Saturday Evening Club, 8, Mandavalli Street, Madras-28)

副題に、a socio-political quarterly written and edited by young men and women とあり、C.P.I. (M) の人々の手によって刊行され出したものである。毎号40ページほどの小冊子であるが、取り上げられている問題は、政治・経済・文化の多岐にわたり、通常の新聞ではつかみ得ない、現在の政治情況(マドラスを中心とした)について知ることが出来る。(辛島 昇)